68 期リレーエッセイ

そのときどう動く

会員　井手上 祐希

1　はじめに

弁護士登録をしてからもうすぐ1年が経とうとしている。弁護士になりたいと思い始めてから10年，ようやくそのスタートを切ることができたが，この1年間は，当初自分が想像していたものとは大きく異なるものとなった。

2　一人での仕事

当初の自分の想像では，弁護士登録をしてから最初の数年間は，先輩と共同で事件を担当し，指導を受けて学びながら，やがて独立して一人で事務所を経営することを考えていた。

ところが現実には，初めからほとんど一人で事件を担当することとなった。最初の2か月あまりは，一人で方針を決め，書面を起案し，裁判所や相手方とやり取りすることが不安で仕方なかった。自分の方針が正しいのか分からず，先輩と仕事をしている同期を羨ましく思い，このままやっていけるのか悩む毎日だった。依頼者との打ち合わせは特に気を使う事項で，間違ったことを言ってしまったらどうしよう，必要なことを聞き洩らさないだろうか，などと考え，事前に聞くことをすべてメモした書面を何時間もかけて作成して打ち合わせに臨んでいた。

しかし，このような状況に置かれて経験を積むうちに，何か困ったことがあったときでも，とりあえず自分で考えて何とかする力が身についたと思う。自分一人しか事件の内容を把握しておらず，何かあれば自分が責任を負うことになる。分からないことは文献でも判例でもとにかく自分で徹底的に調べ，どうしても分からないことだけ先輩に聞くという自分のやり方が出来上がった。また，打ち合わせも，現在は当初ほどには怖いものではなくなり，聴取内容に関するメモも比較的短時間で作成できるようになった。

3　会派活動

また，思いがけず会派の執行部に所属することとなり，会派活動に参加する機会を多く持つことになった。

去年の今頃は，自分が会派活動をするなどとは想像もしておらず，最初に誘われたときも，あまり興味が湧かず消極的な姿勢だった。しかし，日々仕事で関わる一つ一つの事件を離れて，もっと大きな視点で弁護士の置かれている状況・その問題点を俯瞰するというのは，新鮮で面白く，そこで得たものを普段の業務にも還元できることもあり，非常に有意義であった。

また，会派活動の延長で，お酒を飲む機会も増えた。去年まではお酒の場が苦手で，飲み会もなるべく参加を避けていたが，実際に参加してみると，お酒の場でしか聞けない話もたくさん聞くことができ，非常に楽しい時間を過ごすことができた。

4　終わりに

私のこの1年間は，自分が当初思い描いていた通りのものではなかった。しかし，非常に充実していたことは間違いない。

私は，高校時代の先生から，高校卒業に際して，「そのときどう動く」という言葉を贈られた。もとは，詩人の故相田みつを氏の言葉である。自分の理想通りに物事が進まなかったとき，ふて腐れて投げ出すのではなく，少し我慢して向き合い，粘り強く取り組み続けることで，新しい可能性を見つけることができた。この姿勢を，これからも持ち続けていきたいと思う。